

『風』

作◎長堀博士

人物◎

男 A

男 B

女

*台本上の「／」（斜線）は、普通の文章では「句読点」があつた場所に、その代わりに入れた記号です。気にせず読んで下さればいいのですが、一応説明すると、読み方としては、一切間を開けずに発話して下さい。うまい読み方としては、間はぜんぜん空けないのですが、発音としては句読点があつた時のものにするのと正解になる場合が多いです。

・
・
・

（時は少しだけ昔。古風な出で立ちの男、男Bが山の中、木々に囲まれた草むらにドツカリと座り込んでいる。

そこへ現れる、今風な男、男A。・・・）

1 / 11

男A 「ああ、いたいた、こんな所に、おい、探したよ。」

男B 「ん？ ああ、お前か。」

男A 「こんなところでどうしたんだ？」

男B 「ああ、どうしたんだか。」

男A 「なんだそりゃ。」

男B 「なんだろうな。」

男A 「気味が悪いぞ。」

男B 「だろうな。」

男A 「ふん、訳の分からねえやつめ。」

男B 「探したって言ったか？」

男A 「なに？」

男B 「今言つたら、探したって。」

男A 「ああ、探した探した。」

男B 「じゃ、せっかく見つかつたんだ、何か話せ、用件は何だ。」

男A 「そりゃ、話すき、話すには話すが、・・・」

「風」長堀博士

（男A、急に何かを気にしてか、辺りをキョロキョロと見る。）

男B 「どうした？」

男A 「いや、なんでもない、気配かな。」

男B 「気配？」

男A 「ああ、でも気のせいだ。」

(女が登場する。ゆっくりと、まるでそよ風のように辺りを徘徊し始める。)

男B 「じゃ、用件を言え。」

男A 「ああ、・・・どうだ、一杯やらないか？」

男B 「どうして？」

男A 「用件を言えと言ったろ。」

男B 「それが用件か。なんだ、酒の誘いか。」

男A 「悪いか。」

男B 「・・・うんにゃ、じゃ、座れよ。」

男A 「ああ。(座りかけるが)・・・風が、出てきたな。もうすぐ降ってきそうだ。」

男B 「なに？」

男A 「雨だよ。他に何が降る。」

男B 「ああ。」

(二人して男Aが持ってきた酒をあおる。)

男A 「ああ、腹にしみるな。」

男B 「夏山でも凍死するって知ってるか？」

男A 「夏山？」

男B 「ああ、凍死だ凍死、凍え死ぬって話だ。」

男A 「なんだよ、急に。」

男B 「お前が風が吹いてきたなんて言うからだ／雨に、やられてずぶ濡れで長い間強風に吹かれたりしたら／それだけで、人は死ぬんだぞ。」

男A 「まあ、そうだろうな。」

男B 「『寝るな！、ここで寝たら終りだぞ！』ってあるだろ？」

男A 「ああ。」

男B 「あれはな、人間の身体は寝ると体の熱生産が低下するからだ。熱生産は肝臓や背中にある褐色細胞組織が行って／血液が、全身にそれを運ぶことになっている。だが熱が体から逃げ続けて熱生産を越えようと体温維持が、できなくなり低体温状態になる。三十五度以下で全身が震えだす／これは、震えによって熱を発生させようとする自律的な反応／三十度、意識レベルは錯乱や幻覚を生じるようになり心臓の、働きが弱まり始める／この時点で、救急救命処置が行われないと致命的な状態にな

る／二十五度、『寝るな！ここで寝たら終りだぞ！』二十度、十、五度。

男A「おいおい。」

男B「はははは。いやいや、でも話はこれで終わりじゃない。人間が凍死に至るもつとも直接的な原因って何だか分かるか？」

男A（即答で）「分からん。」

男B「少しは考えろ。」

男A「考えて分かることか？」

男B「今言った心臓の、機能低下だ。心臓の筋肉は絶えず弛緩収縮を繰り返して血液を、全身に循環させているんだが／このリズムを、刻むのは細胞内のカルシウムイオンの濃度変化なんだよ。心筋の細胞膜にはカルシウムチャネルという小さな穴が多数存在し／これが、開閉を繰り返してカルシウムイオン濃度の波を作り出している。恒温動物の細胞膜が活動しやすい温度は三十七度。ところが体温が急に低下すると細胞膜の脂質が固まりだして／その固まった、脂質の中ではカルシウムチャネルの開閉運動ができなくなり／カルシウムの、出入りが滞ってしまいその結果、『心不全』を起こし／これが、凍死の直接の原因となるわけだ。」

男A「お前、凍死に詳しいな。医者か。」

男B「医者じゃねーだろ、調べたんだよ、最近な。」

男A「変なことを調べるヤツだなあ。」

男B「気になるとどうにも調べないではいられない性質（たち）だからな。」

男A「そうか？」

男B「ああ。探したのか？」

男A「ん？」

男B「さっき言ったろ、探したって。」

男A「ああ、探したよ。」

男B「じゃ、せっかく見つかつたんだ／用件を言え／酒、以外の方だ。」

男A「・・・ああ、そうか、そうだ、な・・・。」

男B「言い難い話か？」

男A「ああ、うん、まあ、そうだな・・・。」

男B「もう俺の耳に入っていないもか？」

男A「耳に？」

男B「ああ、人の噂は早い、もう耳に入っているよ／女房の、話だろ？」

男A「・・・ああ。」

男B「噂になちまつてるかならな、わざわざ教えに尋ねる親切もいる、耳に入らないわけがなからう。」

男A「そう、そうか、間に合わなかったか。」

男B「ん？」

男A「友達だからな、知られるのも怖い、知られるなら知られるで俺の口から知られたかった。実は、お前に内緒で、その・・・出来てしまった。」
男B「うん。」

男A「偶然街で出くわしてな、二三相談があつて、少し長く話をしている内に、もうどうにも気持ちちが抑えられなくなつてな。」

男B「そりやいつの話だ？」

男A「かれこれもう半年ほど前だ。」

男B「そんなに前からか。」

男A「ああ。すまない。」

男B「謝られてもなあ。」

男A「ああ、そりやそうだな。」

男B「頻繁に会いすぎだ。」

男A「会い、すぎたか？」

男B「ああ、色々な人に見られてる。噂になるほどだぞ。浮気は浮気らしく陰でコソコソやれよバレねえように。」

男A「いやそうじゃないんだ。」

男B「何がそうじゃない？」

男A「違うんだ。」

男B「なーにが？」

男A「浮気じゃないんだ。」

男B「ん？」

男A「浮気じゃない、本気になつてしまった。」

男B「ばか。それを世間では浮気というんだぜ？」

男A「ああ。ああ／そうかもしれないがでも違うんだ。本気なんだ。陰でコソコソなんてそんな、ことが出来るほど簡単ではなくなつてしまったんだ。」

男B「おいおい、それが亭主に言う言葉か。」

男A「す、すまない。でも言わねばならぬと、出来れば噂が耳に入る前にと思つてたが／すまない、順序が狂つてしまった。」

男B「順序なんかどうでもいい。まったく困つたことをしてくれたもんだよ／まったくよお。」

男A「ああ。面目ない。」

男B「それを言いに来たつてわけか。」

男A「そうだ。いや、なんだ、それと、」

男B「まだあるのか？」

男A「ああ、ある。多恵子さんのお腹には俺の子がある。」

男B「ん？」

男A 「お腹に子供が出来てしまった。」

男B 「なぜお前の子だと分かる?」

男A 「そりゃ、・・・なあ、お前と多恵子さんは最近はそのいうことがなかったと聞いた。だったら俺の子に違いない。」

男B 「んー、それは多恵子が言ったんだな。」

男A 「ああ。」

男B 「最近はしてないって。」

男A 「ああ。」

男B 「それを信じたのか。」

男A 「そりゃ、嘘だって言うのか?」

男B 「気を使っただんだな、いや、自分を少しでも良く見せようとしたんだ、悪い女だよ、あいつは。」

男A 「じゃ、じゃあ俺の子じゃ、ないって言うのか?」

男B 「そんなのは分からん。医者に言って調べられるもんなのか、生まれた後じゃないとハッキリしないものか。生まれちゃったら似てる似てねえってえのがあるからな、まあ分かるだろうが。」

男A 「いいや、お前は嘘を言ってるな。」

男B 「嘘?」

男A 「お前こそが今、嘘を言ってるな。多恵子さんとはもうずっと寝てないな?」

男B 「なんでそんなことを言う?」

男A 「そりゃ、どっちを信じるか、天秤に掛ければ分かることだ。多恵子さんはハッキリ言ったよ、間違いなくあんたの子だと。他には考えられないと。」

男B 「友達より多恵子の方を信じるってか。」

男A 「ああ。それにあんなこと・・・、俺たちは確かに頻繁に会っていた。頻繁に会って、寝ていた。お前にくどくど説明しても仕方がないが、ああいうことをあれだけやって、他の男となんて出来るわけがない。亭主とも? ないない、身体が保つまいよ。」

男B 「お前はガキだからな、女というものを知らんようだな。女は凄いぞ、俺たち男が考える以上だ。多恵子は亭主の俺が言うのもなんだが淫乱だよ。淫乱。ああいうイイ女って言うのにはそれなりの理由があるもんだ／身体が、もたない? そんなのは男の側の気持ちに過ぎない／女は、違うぞ。あいつらは俺たちが精根尽き果てている間／むしろ、元気になりやがる。男の精根を吸い取って／それで、生きてやがるんだよ女って奴は。」

男A 「お前、自分の女房に酷い言い様だな。」

男B 「酷い? 何言ってる、褒めてるんだよ／いい女だと。俺は多恵子を絶賛しているんだぜ／なあ、お前は本物の多恵子を見ちゃあいないんじゃないか? お前は自分に都合のいい幻を見るだけなんじゃないのか?」

男A「そんなこと。お前は、多恵子さんを悪く見すぎている。確かに亭主がいるのにそんなことになるのは褒められた話じゃない／悪い、女だよ／それは分かっている。でも、なんて言うか、好きになってしまったんだ。悪いのは自分ばかりじゃない、運も悪かったんだ。もしお前と一緒にいる前に／俺と、先に出会っていたら／こんな、ことにはならなかった／彼女じゃない。彼女じゃないんだよ／運が、悪かったんだ／いや、分かっている、俺もそれにや随分加担した／罪なら、俺が背負うよ。」

男B「そりゃそうだ。お前がまず悪い。だが多恵子も同罪だな。きれいな女房だと言われいい気になって油断していた俺も俺だが、悪いは、やっぱりお前達二人にある。」

男A「すまない。」

男B「謝って済む問題か？」

男A「いや、だが、……なあ、多恵子さんを俺にくれ。」

男B「何を言ひ出す。」

男A「すまない、多恵子さんを俺にくれ。俺にくれ。全部水に流せ、許してくれ。」

男B「おいおい、何を言ひ出す／寄りにも寄ってそんなこと、そんなことが出来るわけがないだろ／馬鹿も、休み休みに言え。」

男A「多恵子さんを俺にくれ／それを、言うためにお前を探していたんだ／もうどうにもならん、多恵子さんを俺にくれ／許してくれ。」

男B「耳の穴かっぽじいて聞け、出来ない。何度言われてもそれは出来ない相談だ／出来ない。多恵子は誰にもやらん。」

男A（男Bを掴みながら）「そんな、そんなこと言わないでくれ／堪忍してくれ。もうどうしようもないところまで来ているんだ／多恵子さんを、俺にくれ／俺にくれ。」

男B「えーい、放せ。そんなにくれくれ言われても金や食いもんとは訳が違うんだぞ／いい加減にしろ。」

男A「いや、いい加減にはしない／許して、もらうのが俺の願いだ。」

男B「お前の願いはいいが／じゃ、多恵子の気持ちはどうなる？ だいたいお前／多恵子の気持ちは知っているのか？ 分かっているのか？ 聞いているのか？」

男A「聞くまでもない／分かっている。多恵子さんも俺と同じ気持ちだ。」

男B「だからお前は馬鹿だと言うのだ／女を知らない。知らな過ぎる。多恵子と同じ気持ちな訳ないだろ。」

男A「お前こそ多恵子さんをぜんぜん分かってない／多恵子さんは、俺と同じ気持ちなんだよ／同じ、気持ちなんだ。」

男B「いや違う。お前は間違っている。」

男A「いや！ どうしてそこまで自信持って言えるんだ／女を、親友に寝取られて／そんな、お前に女房の何が分かるって言うんだ／お前こそ、なんにも分かっちゃいないんだよ／お前こそ、お前こそ。」

(一旦落ち着く二人の言い合い。風が吹いている。それが音楽に聞こえるかも知れない。)

男B「・・・(酒を一口口に運ぶ)・・・お前の、方が、諦めるって選択肢は、ないのか？」

男A「ない。」

男B「そうか。・・・なあ、もうすでに俺の耳に入っていた、その意味が分かるか？」

男A「意味？」

男B「俺はもちろん／お前と、こんな話になる前に／まず、そりゃそうだろ、女房をとつちめた。聞いただして聞いたよ／俺に、黙って我慢している理由なんかない。」

男A「・・・お、お前まさか、多恵子さんに暴力なんてことを・・・」

男B「いや、怒りはしたが／そんな、ことはしちゃいない／手なんか、上げちゃいないよ／出かかったがな、だが、あのきれいな顔を殴れるか？ そのことを分かって自分の顔を盾にしているあいつの性格にはムカついたが／どんなに、腹を立てて声を荒げてても手は上げられなかったな。」

男A「そんなことをしたら俺がお前をぶっ殺してやる。」

男B「おっ、殺すか。」

男A「ああ、脅しじゃない。多恵子さんに酷いことをしたら／俺だって、正気じゃいられない。」

男B「そうか、正気じゃいられないか。」

男A「なんだ。何が言いたい。奥歯にものが挟まった言い方するな。」

男B「ああ。だな、だな、・・・」

(しばしの沈黙。風が聞こえつかも知れない。)

男B「・・・まだ、風を感じるか？」

男A「風？」

男B「感じるか？」

男A「ああ、吹いてるね。吹いてる。ずっとだ。」

男B「そうか。それは多恵子だよ。」

男A「えっ？」

男B「あいつはな、風になったんだ。」

男A「・・・な、何を言ってる？ おい、多恵子さんはどこだ？ 家か？ 今どこにいる？ お前、どこかに隠したんではあるまいな？ どこだ。多恵子はどこだ！ おい！」

男B「お前を落胆させたいわけじゃあない／だが、もうどうにもそうなってしまったんだからしょうがない。」

男A「どういう意味だ！」

男B「信じるかい？ 多恵子はな、お前とのことが俺にバレてひたすら謝ったよ。謝っ

た。地べたに頭打ち付けるように謝った。でもな、俺はどうにも腹の虫が納まらなくって／＼どうしても、許せなかったが／＼あいつは、謝ったよ。謝った。自分が悪かったと／＼男とは、別れると、もうこんなことは二度としませんと／＼何度も言い、ただただ謝った。」

男A 「嘘だ。」

男B 「本当だ。」

男A 「嘘だ！」

男B 「真実だ！ お前も薄々分かってるんじゃないのかそうなることが。そんな風に幕を閉じるのがこういったことの顛末だとお前だって、お前だってな。だがな、だが、俺は許せなくってな、それでも許せなくってな、殴ることもできねえし、もうどうにもイライラして／＼家から、追い出して／＼戸を、開けてやらんかった。一晩中。戸の向こう側ではずつと、泣き声が聞こえていた／＼ずつとだ。ずつと、気味が悪くなるくらい長い間／＼あいつの、泣き声がシクシクと、まさにシクシクと聞こえていたんだ／＼昨日の晩のこった。覚えてるだろ？ 春とはいえ寒い晩だった。小雨が降って風も吹いていたつけ／＼たぶん、かなり寒かったんだろな。」

男A 「・・・お、おい、どうした？ おい、どうしたんだ！」

男B 「シクシクと、シクシクと聞こえていたと思っただがな、いつの間にか、それは風の音だったんだ／＼いつのまにか、多恵子は静かになっていて／＼俺は、それでも泣きながら、息絶えていたんだからな。」

男A 「おい！」

男B 「はっと気がついた。声がしたんだ。多恵子の声が、本当は外にいるはずの多恵子の声が／＼なぜだか、家の奥から聞こえた／＼ごめんね。」

女 「ごめんね」

男B 「堪忍して。」

女 「堪忍して」

男B 「俺ははっとしてまず家の奥を覗いた。誰もいない。探しても、どこにも多恵子なんているはずがない／＼そりゃそうだ、多恵子は外で、家の外で、家の戸にすがって泣きながら、息絶えていたんだからな。」

男A 「えっ？」

(動けない男たち…… 徘徊していた女が……)

女「・・・人間の、身体の熱生産は肝臓や、背中にある褐色細胞組織が行って／＼血液が、全身にそれを運ぶ。けれど熱が体から逃げ続けて熱生産を越えると体温維持が、できなくなり低体温状態になる／＼三十五度、全身が震えだした／＼これは、震えによって熱を発生させようとする自律的な反応／＼三十度、意識レベルは錯乱や幻覚を生じ

るようになり心臓の、働きが弱まり始める／この時点で、救急救命処置が行われないと致命的な状態に陥る／心臓、私の心臓、・・・心臓の筋肉は絶えず弛緩収縮を繰り返して血液を、全身に循環させている／ドクン、ドクン、ドクン、このリズムを刻むのは細胞内のカルシウムイオンの濃度変化。心筋の細胞膜にはカルシウムチャンネルという小さな穴が多数存在し／これが、開閉を繰り返してカルシウムイオン濃度の波を作り出す／ドクン、ドクン、ドクン、恒温動物の細胞膜が活動しやすい温度は三十七度／ところが、体温が急に低下すると細胞膜の脂質が固まりだして／その固まった、脂質の中ではカルシウムチャンネルの開閉運動ができなくなり／カルシウムの、出入りが滞ってしまいその結果、・・・ドクン、・・・ドクン、・・・ドクン、私の心臓は心不全を起こして／それによって、わ、た、く、し、は、・・・」

(時が動き始める。)

男A「・・・な、何を・・・、そんな、・・・おい、嘘だろ？ そんなわけ、お前は・・・多恵子さんを見殺しに？」

男B「望んでそうしたわけじゃない。」

男A「多恵子さんを見殺しに？」

男B「望んでそうしたわけじゃない。」

男A「信じられん。本当か？ 多恵子さんは死んだのか？」

男B「ああ。死んだ。死んでしまった。」

男A「き、貴様！！ 何てことを！！」

男B「悔やんでも悔やみきれないとはこのことだ。」

男A「許さん。お、俺は、お前を許さない。」

男B「許さないならどうするね？」

男A「貴様、なんでそんな飄々と。決まっている！ お前をこの手で殺してやる！！」

男B「そうか。そうだろうな。すまない。」

男A「謝って済む問題か！！ 立て、今この場で殺してやる。」

男B「すまない。お前のその望みは適えてやれないんだ。」

男A「いいや俺が殺してやる／立て。」

男B「殺せるものなら殺されてもやりたいもんだが／すでに、死んだものをどうして殺すことができよう。」

男A「な、なに？」

男B「親友よ。済まない。申し訳ない。」

男A「な、なんだ、どういうことだ？」

男B「俺は多恵子の死を確認してすぐに自害したよ／いや、すぐじゃないなあ／本を、読んだんだ。医学書だ。何かのために買って買った方がいいが一度も開かなかった家庭の、医学書を初めて開いたよ／どうして、多恵子がこんなことになったか／何だか、調べないではいられなくなった／おかしいだろ？ 俺もおかしいと思う／風が、吹

いていたな。家の中に風が舞っていたよ／そして、その後は考えるまでもない／震える足で、倒れるように台所に行つて包丁を、取り出すとそれで首を一突きよ／ああ、あっけなく命を絶つた。」

男A「な、なんだと?」

男B「お前と一杯酌み交わすのはたぶん、俺の未練がこの世に残した最期の仕事よ。」

男A「・・・お、お前、幽霊か?」

男B「ああ。自分ではよく分からんが、そうらしい。あとな、お前には見えないうだが一つ教えといてやろう。多恵子もここにいるんだ。」

男A「た、多恵子さんが?」

男B「いる。だがお前には見えない。風を感じるだろ? それが多恵子だ。生きているお前には多恵子は風としか感じられないはずだ。」

男A「な、何を、お前・・・」

男B「ほら、感じるだろ? 多恵子もお前にすまないと思つている。」

男A「なんだと! お前あの世でも一緒になるつもりか! 地獄に行つてまで多恵子さんを俺から引き離すのか!」

男B「ああ。ああ、そういうことになる／さっきから、何度も言つてるだろ?／多恵子は、誰にもやらんと。すまないな、もうこうなつてはお前には、手出しが出来ない世界よ。」

男A「・・・」

男B「やめておけ、お前には仕事を頼まれてくれないと困るからな。」

男A「し、仕事だと?」

男B「誰が葬式を出すね／早く、俺の家に転がつてる俺と多恵子の亡骸をなんとかしてくれ。」

男A「そんな、そんな勝手に。」

男B「お前には責任があるからな／誰が、悪いか自分の胸に手を当ててよ／く考えてみる／惚れた、女と友達の葬式くらい出してくれ。な、な、お願いしたぞ。」

男A「お、おい。」

男B「じゃあな。すぐにはこっちに来るなよ。こんな悲劇は現世だけで十分だ。」

(男B、消える。)

女「すまないね」

(はっとする男A。)

男A「・・・か、風・・・ いるのか? まだ、いるのか? 風・・・、風・・・」

(女、
ゆっくりと去っていく。・・・)

終わり。